

第 13 回 アート知っとくミーティング

—図工・美術・書道の教育の魅力を探る—

日 時： 2016 年 12 月 23 日(金) 13 : 30~17 : 00

場 所： 大阪教育大学天王寺キャンパス 西館 2 階 8 講義室
(大阪市天王寺区南河堀町 4-88)

特定非営利活動法人 アート知っとく会

— プログラム —

○第1部 アートの視点でこどもの学び・生活を考える

-NYC モンテッソーリスクールのアトリエ教育経験から- 13:30~15:15

提案者：近江 綾乃（京都造形芸術大学教授）

○第2部 「美術教育・グローバル・プロジェクト」について 15:30~16:30

提案者：渡邊 美香（大阪教育大学准教授）

○みんなで話し合おう 16:30~17:00

鑑賞教育の発表に関する内容や、日頃、図工・美術、書道教育に対して抱いている疑問や思いを参加者同士自由に語り合います。

(敬称略)

アート知っとくミーティング報告（第13回）

第13回のミーティング司会は福光によって行われました。第1部では、はじめに海外でのこどものアート授業と大学での幼児教育をめざす学生を対象としたアート教育への取り組みについてパワーポイントによるお話があり、その後新聞紙とアクリル絵の具を用いたワークショップが行われました。第2部では、国際交流におけるアートの可能性についてパワーポイントによる発表が行われました。以下ミーティング内容を報告します。

第1部 アートの視点でこどもの学び・生活を考える - NYC モンテッソーリスクールのアトリエ教育経験から - 近江 綾乃(京都造形芸術大学教授)

はじめに

現在、京都造形芸術大学こども芸術学科で、アートの視点に立った幼児教育、教員養成をしております。が、昨年までニューヨークのモンテッソーリスクールで、20年間いつでもアトリエにいるスペシャリストとして、3才から12才のこどもの美術教育に携わってきました。イタリア、レッチョエミリアでの、アトリエリスタ:atelierista と呼ばれるポジションと言えるでしょうか。アメリカの私立の学校、特に、オータナティブ教育の域である、モンテッソーリスクールは、日本のように文科省や厚生省からの寄付金に頼ることは無く、まず学校に付加価値をつけ、魅力的な教育を提供する理念を掲げ、ファミリーや企業からのファンドレイジング(資金援助)で支えられています。一般に、私立学校の特色を出すために、ニューヨークではカリキュラムにある芸術活動の幅や質が問われ、私の勤めていたモンテッソーリスクールも、現役のアーティストやミュージシャン、パフォーマーがスペシャリストとして加わりました。アトリエには私ともう一人のアーティストが入り、アートの視点からこどもの生活をつなぐ活動が日々行われました。このモンテッソーリスクールのアートルーム(アトリエ)ではアートの先生が常について、レッスン(授業)もしますが、ホームルームのアート活動の補助やレッスンの連動、また特別に、水彩をしたい、土粘土をしたいというこどもを放課後集めアフタースクールもします。そのアトリエは、ビルの最上階にあり、日当たり、風通し、眺めも良く、また水場も確保されています。アートの材料や道具は、アトリエの材料棚に見えるように置かれ、いつでも制作しやすい環境が整えられています。

ではここで、アメリカで活動するに至った経緯について簡単にお話しいたします。大学を卒業した当時1980年代半ばは、日本の景気は尻上がりで、大学卒の仲間の多くは海外で勉強をしたい、働きたい、という夢を強く抱いていました。今以上だったと思います。デパートが文化発信もするという時代に新卒で西武セゾングループに入社しました。国内外の物流だけでなく、文化交流を海外にも推し進めていこう、という波に乗り、ニューヨーク駐在で勤務をする機会を得ることができました。同時に、ニューヨークでは作家として作品制作をする憧れもありました。その実現のために、ニューヨーク市立の大学院で造形を専攻し、そこでのネットワークを足がかりに、スタジオ・アーティストとして、主に土を用いた大きな作品(クレイワーク)や、ドローイング、版画作品を発表する活動に没頭していきました。

なぜ何十年も土を使って大きな立体を作っているのかと聞かれるたびに、私のインスピレーションの「もと」は一体何なのか、と改めて思い返します。するとそこに小さい頃の私が出てきます。辿り続けると、かなりの時間をさかのぼることになりますね。

私の幼少期の話を少しさせていただきます。小学校低学年のときぐらいでしたか、その頃、興味を持ち感化されたものに、縄文土器と竹と蓮がありました。縄文土器は、小学校の遠足の時に見て、粘土のひもで作られているデザインやその土器の大きさに圧倒されました。また、竹やぶが近所にあり、竹を触ったり、竹のてっぺんがどこまで伸びているのか、と見上げてみたりすることが好きでした。それから母方の実家がある谷中(東京)界隈のお寺や公園の池の蓮について、そのお寺の住職から「蓮の根っこは池の下のだろどろとした土の汚いところにはっているけれど、その茎は水面上にすーっと伸びて大きな緑の葉を広げ、ピンクや白の立派な花を咲かせるものだ」と教えられたことが記憶に残っています。それから、『竹取物語』の竹の節の間から光るものが現れる場面、また『エルマーのぼうけん』という本に描かれた手描きの地図に想像を膨らませたりしました。地球という星が私にとって、とても不思議なもので、その大きさや広がり、特に日本という国の果てに興味を持ちました。地球と漢字で書くと「地」という字があてられ、英語で言うと The Earth で「土」という意味であることを知り、地球の表面に土があるんだ、と自分自身納得して、土探しや、土を掘ることをよくしていました。集めた土を水と混ぜて練っていると粘土になる実験も好きでした。実験ばかりでなく、きれいな形を土粘土で練り上げ、乾かし、焼いてその形が固まった後、食卓で食器として使えることも素敵だと思いました。たまたまヨーロッパから遊びに来た知り合いが「ブドウは場所や気候によって様々な色や形、味があるので、ワインも種類があって面白い。日本酒も同じでその土地でとれたお米によって、味も香りも違うから面白い。」と話していたことを耳にし、こどもながらも、地球の土はその堅さや色も違うから、植物や実の形や色、質もそれぞれ違って、土が全てなんだ、と考えていました。当時、担任の先生に「この地球上に生きられる一回のチャンスに、地球の土を全部を触りたいな」と話したことを記憶しています。

私のアート作品はスライド(図 1、2)のようなものです。チャコールで描いたドローイングでは、下から上へ伸びていく力を表してみました。トーテムポールのようなですね、と言われます。上に向かって高くのぼしてみたいという思いがありました。土粘土で背の高い大きな立体を作る時は、竹の節々で分かれる構造を使って、高さのあるものをセクションで分けてみました。釜で焼く際に、それぞれのセクションを入れて焼けば、大きな釜は不要になるし、焼きあがった後に、そのセクションを積み上げることで、出来上がりはかなり高く大きくなる、という単純な方法をとります。でも、見る人は、なかなかその「セクション」に気付くことはないようです。白色はオランダの土、赤色はアメリカの土、ブルーと黒色は信楽の土で、それぞれの地域性のある土に自分の思っている感覚を合わせて作りました。地球上の様々な土に触るために、世界のアーティスト・イン・レジデンスに参加し、滞在先のこどもたちとタイルの壁や庭を造りました。2ヶ月ほどその地域に滞在するとそこに住む人々やアーティストとの距離が縮まり、活動がより楽しくなりました。フランス、ガーナ、アルゼンチンと、制作や地域でのワークショップをしながら交流を深め、また、メキシコでは、土だけではなく版画(プリントメイキング)特に木彫とリトグラフをこどもたちに教えました。私のこどもへの関心が高まったきっかけは、国境を越えて、こどもたちや学生たちと出会い、そこで一緒に手を動かして「つくる」という地域活動だったと思います。こどもたちはどんな時でも、何かを生み出したいというきらきらとしたエネルギーを持って集まってくるものです。そのこどもの力が、インスピレーションになり、結局、こどもに関わる仕事から離れられなくなりました。

「生活」をアートの視点から振り返り、気づいて学ぶこと

こどもの教育に取り組む第一歩は、「幼児ってだれ? こどもって誰?」と観察を始めることでした。そして、0-3 才児、3-5 才児、5-7 才児というグループ毎にこどもの生活とアートの関わりも見ていきました。私はモンテッソーリスクールにつとめていましたので、モンテッソーリ教育法と合わせてみていくことができました。モンテッソーリ(Maria Montessori 1870-1952)はイタリアの女性教育家で、自然主義的自由教育の考え方にたち、1907 年にローマで設立した「こどもの家」という保育施設で、独自の教具をもちいてこどもの自発性を基本としながら、五感を丁寧に使った「モンテッソーリ教育法」を実施した人です。こどもにとって大切な 2-4 才の幼児期に、どのような援助を



図 1 ドローイング作品



図 2 立体作品(クレイワーク)

すべきかを考え、子ども達がつくるコミュニティ・共同体を中心に「毎日のきまった仕事・ルーティーン」を重視する教育を普及させました。モンテッソーリの教育理念が世界中に広がっていきなで、その実践は地域独自の指導内容や方法に翻訳されていきました。私もモンテッソーリの考え方と自身のアートの導入法を融合させながら、担当する子どもたちの学びに合うレッスン作りをしてきました。モンテッソーリの教育法の一つは、各ホームルームのなかで算数、理科、社会科、美術、音楽などすべての教科を包括的に指導するというものでした。でも、私の勤務したモンテッソーリスクールでは、幼稚園児から6年生までの子どもを対象に、ミュージック、パフォーマンスアート、ビジュアルアートの時間を特別に設け、アートはアートルーム(アトリエ)で指導するというモンテッソーリには見られないカリキュラムを20年前に始めました。それは、数多くあるモンテッソーリスクールに特別な付加価値をつけるものでした。

次に子どもの生活の観察からはじまる教育方法について、年齢別に紹介していきたいと思います。

まず、0-3 才では、乳幼児が生活の中でどういう感触を見つけ、何が嬉しくて、また何が嫌なのかを観察することが重要になります。家族の中で、お兄ちゃん、お姉ちゃんを意識し、次第に何かを手伝いたい、周りのコミュニティに入りたいという欲求を表していることが分かります。道具の使用に関しては、最初に道具をいじりまわしていますが、時間が経つにつれて使えるようになっていく幼児の姿に感覚の敏感さ、成長の早さを感じます。

3-5 才では、保育をするカリキュラムと併せて観察していきます。歩き方から始まり、人を助けながら大きなものを動かしていくこと、また、室内に飾られた花や葉を丁寧に扱う姿を見せるなど、外界の自然を室内に持ってきて、幼児に紹介する時間があります。幼稚園では、ランチのテーブルを整えたり、メニューを考えたり、日常生活のルーティーンの中で、子どもたちが自主的に動きます。

ものづくりの基礎となるスキルの発達として以下4つのポイントに注意して子どもを観察していきます。

1. 手と指のコントロールができています？ Fine motor coordination
2. 認知ができています？ Cognitive skill
3. 1, 2 を合わせた構成技量がある？ Organization skill
4. 感覚の発達？ (色、かたち、匂い、手触りなど5感) 体全体のコントロールは？ Sensory development

これらのスキルの発達は、はさみやのりを使う、色を分けてビーズを通すというような活動のなかで見ることができます。この時期に「いろいろなものを集めて並べてみようか」と促すと、各自様々な並べ方で、でも、とても丁寧に並べる様子を見ることができます。数を導入する際は、数字の書かれた紙を印字に沿って画鋏で穴をあけながら数を覚えるという方法や、砂の入ったトレー(長四角のお盆)に指でアルファベットを何度も書いては消すという方法(砂の感触を感じながら手の動かし方を身につける)を用い、手を使いながら理解していく実践をしていました。幼稚園、4-5 才になるとアートのスキル導入に重きを置いたレッスンプランが入ってきます。週に一度、45 分の時間枠でアートルーム(アトリエ)で楽しく絵画、ドローイング、立体作品を工作するという活動が行われます。アートルームでの授業では、通常の教室ではないアトリエ環境を設定し、素材を手にながらゆっくりと、集中できる時間を提供します。また、アトリエスタはアートの視点を生活の中に導入するための仕掛けも考えます。

モンテッソーリ教育法では、Isolation of difficulty の概念があり、教える内容を、[A]素材の導入、技術を教えること、[B]概念/コンセプトを教えること、に分けて教えることを提唱しています。[A]を伝え、それから[B]を、ということになります。ここで、具体的にこの2つの

[A]、[B]を見ていきます(図3)。[A]では「素材、道具」に焦点をあて、材料の紹介、道具の紹介、目、手、指のコントロールの練習を行います。例えば「紙」を扱う場合は、「紙とはなにか？」と質問を投げかけます。子どもは、紙の匂いをかいでみたり、ぐしゃぐしゃに変形してみたり、「音が出るね」と気づいたりします。そして「紙を使っていったい何ができるのか？」を考えさせると、「紙は洋服にもなるし、飛行機にもなる、傘にもなる」と、生活の中から対象物を見つけていきます。筆を使う前に、「筆ってなに？」「筆を使って何ができるの？」「触ってみて」と言うような問いかけをし「罎のような形をしているね」「毛があるよ」というような会話をしたこともありました。鉛筆、クレヨン、粘土、ひもなど、身の回りの材料も紹介し、丁寧に観察していきます。

[B]概念コンセプト、というのは、例えば、「○とは何か」「線とは何か」「□とは何か」というように線、形の感じやフィーリングをもとに創作したり、ストーリーをもとに発想したりする練習になります。

[A] 素材 材料 道具	[B] 概念 コンセプト
材料の紹介 道具の紹介 目、手、指のコントロールの練習 Fine motor coordination Hand-eye coordination 紙 紙ってなに？ 紙を使っていったい何ができるの？ 筆 筆ってなに？ 筆を使って何ができるの？ 鉛筆 クレヨン 粘土 ひも	概念(コンセプト)の紹介 線、形、感じ-フィーリングを話す ストーリー(もしも...) 線、点、丸 尖った頂点がない形、まっすぐでない線 四角 4つの頂点、線はまっすぐ 高いビル、高いタワー 徐々に積みあがる 四季 春：桜が咲いてあたたかなる 庭が色とりどり 感じの対称 暖かい vs 涼しい 滑らか vs 荒い

図3 Isolation of difficulty

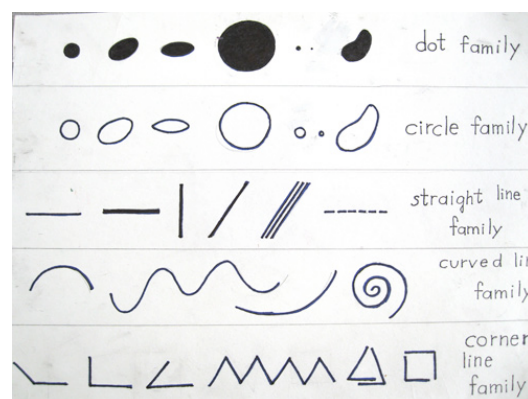


図4 線のグループ

コンセプトの提示の例として「線」を扱う時、私がこどもたちに紹介したものは、この5つのグループ(図4)で「どんな線が書ける?」「どんな形が書けるかな?」という導入でした。他に点、○は、尖った頂点がない形、まっすぐでない線であることを発見したり、□は4つの頂点で線はまっすぐであること、高いビルや高いタワーは徐々に形を積み上げていくことで作られることに気づくような活動があげられます。四季の特徴(春:サクラが咲いて暖かくなる、庭が色とりどりなる、など)から構想したり、暖かいvs. 涼しい、滑らかvs. 荒いなど、対称から学ぶ練習もあります。

生活の中で起きる事象をこの[A]と[B]を分けずに、一つのまとまりとしてこどもの前に提示しますと、こどもはその事象の手がかりを探そうとしますが混乱も出てきます。ですから、[A]と[B]を別々に行い、最後にじっくりと丁寧に事象を再び結びつけて提示していきます。大人でのワークショップでも、これら[A][B]を分けて提示すると複雑に思える物事がシンプルになり、取りかかりやすくなることに気づきます。

ここで、[A]素材-テクニックと[B]コンセプトを結びつけたレッスンを紹介していきます。1つ目は、「かたちを探しだす」という題材です。新聞紙を見てこの中にどんな形が埋まっているかを探しだすという課題です。幼稚園児はまだ新聞が読めないで、新聞の印刷の中にある形を探していくことになります。次に「手触りテクスチャー」を紹介します。ここでは、様々なものを触らせて、その感想をことばで表した後、「感触の違うものを一つの細長い段ボール紙に順に並べてみようか」という提案をします。並べ方は、「大きいものから小さいものへ、ざらざらからつるつるへ、またはアットランダムで」と、こどもは自分の好きなように、感じたように並べていきます。この活動が満足に終了した後に「ざらざらやつるつるの感じをもった動物っているかな?知ってる?」という問いかけをし、そこから動物をモチーフにした作品をつくる展開もしました。三つ目に「セルフポートレート(自画像)」のプロジェクトを紹介します。各自に鏡を配り「さあ自分の顔を描いてみようか?」とは、始めません。「よく自分の顔を見てごらん」「どんな顔(表情)ができるかな」「何が映っているかな」と、こどもと一緒にウォーミングアップに時間をかけ、「今日は目だけよく見て、描いてみようか」とポイントを示していきます。次のレッスンでは、今日は鼻だけ観察して、というように顔の部分を分けて取りあげていきます。こどもは一生懸命に鏡を覗き込んで見るので、時折鼻の穴が4つに見えてしまうこどもも出てきます。また、その次のレッスンでは口びるだけをよく見て描いていきます。その日は、冬でとても乾燥していたこともあり、唇を触っていたら血が出てしまったこどももありました。顔の中の目、鼻、口を一つずつ観察し、それが終わってから、一つひとつのパーツをたくさん描いていきます。全部できたら、その紙面から、一番良く描けていると思えるそれぞれのパーツを選んで、ハサミで切り取り、別紙に描いた自分の顔の輪郭の上に順に並べます。まるで福笑いのように。このアプローチの方法でセルフポートレートをつくっていきます。このレッスンでは、「自分の顔がどうしてもできない」とか、フラストレーションで泣くようなこどもは出てきませんでした。自分の顔ができた!という喜びが大きく、その満足感にあふれるこどもの生き生きとした表情が印象的だったことを覚えています。

5才-7才のこどもは、目と指のコーディネーションが発達し、さらにいろいろなことができるようになります。ものづくりの基礎的なスキルが身についてくる時期です。一人ひとり発達のスピードが違いますが、7才までには、次の5つのことができるようにサポートします。

- 1 見てうつすことができる (複写のスキルの発達)
- 2 ことばが使える (コミュニケーションスキルの発達)
- 3 見て、感じて、ことばでいえる? (ことばの発達と創造性)
- 4 ストーリーが作れ、表現できる (時間を追ってできごとを語れる、その創造性)
- 5 発表できる (意見、感想の共有、鑑賞しあう、教えあう、学び合える、協調性)

「見てうつす」という内容で行ったレッスンに、「木の葉や貝殻を写す」というものがあります。自分の片手に取れる大きさのスケッチブックに木の葉や貝を見て描き、ページを埋めていきます。そして、次にその中から一番気に入ったものを大きな紙に写します。ここでは、こどもは写す「大きさ」への挑戦もしました。幼稚園卒業時には、「自分の一番好きな花を写してみよう」というレッスンをしました。写すときに、自分の回りにどういった素材や道具があるか試してみることも重要になります。クレヨンをはじめ、毛糸、雑誌の切り抜き、のりなどを使って活動しました。小学校1年生で再度展開するセルフポートレート(自画像)の授業では、毛らしいもの、ふわふわとしたものなどの材料を貼り付けながら自分の顔を作りました。土粘土のレッスンでは、素材の土粘土の導入からコップ作りをしました。まず、粘土の紹介:粘土って何?粘土で何ができる?という導入法を使い、[A]の段階を行った後に、コップって何なのか、と毎日使っているコップをよく見ながら[B]の概念:コップの形ってどんなものかな、と展開していきます。

「ことばが使える」という内容では、共同制作、グループ・プロジェクトを行いました。自分だけで作るのではなく、グループでコミュニケーションをとりながら、大きな段ボールの上に自分たちが一番描きたいものを決めて描きます。「ニューヨークの日常生活風景である高層ビルが好きだな」といって、友だち同士でストーリーを作って描いたりしていました。

「見て、感じて、ことばでいえる?」という内容では、ことばを使って vs. ことばを使わないで 伝えてみる実験をしました。ここでは、机の真ん中に大きな一匹の魚を置いて、まず魚を黙って観察し、見たことをことばで話してもらい、次に、その見た様子を、ことばを使わないで伝えられるかどうか、と考えてみました。これは魚拓をしている様子です。そして「不思議に思ったことを言ってみよう」、「なぜ不思議に思ったかを言ってみよう」、「じっくり見て思ったことを一人ずつ形容詞で言ってみよう」というように、ことばで見たもの、とその感想を分けて伝えていく練習もしました。その他「自分の好きな色、嫌いな色」という課題をしました。はじめはことばを使うのではなく色の表現だ

けでやってみよう」と提案したので、左側に好きな色、右側に嫌いな色を描いています。その後、文字が書けることもは、「こちらが好きな色、こちらが嫌いな色」というように画面に文字で説明も加えていました。

「ストーリーが作れ、表現ができる」という内容では、1年生に「もし」というコンセプトを用いた絵の課題を出しました。ストーリーづくりは、先に述べた[B]に当たります。子どもたちからは「もしカタツムリに家をつくってあげるんだったら」「もし、馬がバナナを食べ過ぎたら」というような自分なりの個性豊かな創作話が生まれてきました。このようなストーリーを作り、その絵を描いた背景には、小学校1年生になるまでに、カタツムリの観察がありましたし、また、馬については、私が関わったアメリカの私立の園・学校に通うことにもとって、馬が猫と犬の次に描きたい動物でとても人気があったからです。作品づくりが終わると「発表：意見、感想の共有、鑑賞しながら一緒に向上していく」という時間を必ず設けるようにしていました。人前で恥ずかしがらずに発表する練習もありました。

こども、教育×アート、デザインとは — 大学の教育現場で

京都造形芸術大学では、造形の授業をする際のキーワードに「こども」「教育」「アート」「デザイン」をあげています。それらを私なりに解釈してみます。「こども」と言われる「いきもの」は、敏感な五感を持ち、親しみのある、何に対しても興味深くてしょうがないエネルギー的な存在、大人の小型でない、地球上の「いきもの」の中ではとても独特なグループに入ると思います。「教育」は英語で「education」であり、「e」は外に出る、「ducare」はラテン語でリードするガイドするという意味で、英語では drive(ドライブ)と言いましょ、エンジンを持って前に勢よく出ること、それらが一緒になった言葉が「教育」であると考えられます。「アート」は、私が理解している範囲では「Art is how to express」、アートは自分の思っていることをどう表現するかで、「Voice of soul」気持ちを形にして表現すること、「デザイン」は「How to solve the problems」問題をどうやって解決しようかというものです。

「アート」の場合は、自らの思いや気持ちの表現なので、まずは自身の力で極め、押し進めていきます。受け手から「なんでしょう」「すごいな」「なんで？ どうして？」という反応が出て、作り手と受け手の交換が始まるケースが多いでしょう。でも、「デザイン」になると、「この人の生活を良くしてあげる」「この人のために」というように受け手(対象)の立場がより意識されるでしょう。

将来こどもと関わる仕事をする若者は、これらの表現「アート」「デザイン」と「こども」「教育」を繋ぎ、包括的なアプローチを身につけることが大切で、その力やノウハウを持って人間生活の中の事象の解釈や問題解決にチャレンジしてもらいたいと期待しています。アートの視点 — つまり、なぜだろう、どうしてだろう — で日常生活が見られたら、もっと気づきが増えますし、毎日「魔法解き・魔法の種明かし」をするようで生活が面白くなりますよね。

教員は、常にカリキュラムを見直し、作り直し、学生指導や日々の運営に追われます。忘れがちな、「Who am I?」自分は誰なのか、自分はどこからなぜ来たのか、そして、「Who are you?」目の前にいるあなた(学生)は誰なのか？を振り返ることも大切で、このことは自分自身にも言い聞かせながら、将来教員になりたいという学生にも伝えます。アメリカの恩師から、教室に入るとは、教会や寺院に入るような神聖な行為で、学び、場所、時間とは何なのか、という基の意識を忘れてはいけない、と何度か言われました。この指摘は今でも頭に残っています。

忘れがちなもう一つのコトは、(地球のスライドを見せて) 私たちが奇跡的にもこの宇宙の中の地球に生きていることでしょう。これを大学一年生に話すと、意外な表情が帰ってきます。私はこの事実の再認識でゾクゾク、ワクワクとしてしまいます。とても素敵な惑星に生きているという事実を是非学生皆に感じてほしいと思っています。ある時、学生に地球の地図を描かせた際、多くは日本や中国などの近隣諸国以外の国は描くことができませんでした。描けたからどうなのか、ということではありませんが、このような課題は「私たちはここにいます」ということを改めて認識できる機会をつくれます。また、学生の関心事として卒業後の就職の問題がありますが、少子化といっているのは日本だけで、世界に目を向けると、こどもの数は増していく一方です。地球では人口増加が問題になっています。私の学生は、幼稚園教育をこの国で学んでいます、将来その学んだものを持って、海外に出ることができれば、と思います。学生から「外国語はどうしょう？」と質問されますが、まずは「スマイルが素敵なこと、手が使え、体が使えて、声が出ればこどもは近寄ってきます。そこからです。」と話しています。この段階を経た後に、「それだけでは足りないな」と気づくようになるわけで、その時点で「その地域の言語を覚えよう」と勉強し始めるようになりますね。学生に英語の表現を聞いてもらおうと、造形をしながら英語も時々使っています。紙を折るとか、片付けるとか、色を集めるとか、机を拭くということを英語で言い続けると、次第に耳と手が英語の表現に慣れてきます。英語を教える際、手を動かす造形の授業に英会話を入れていくことは、英語学習に成果を導く一つの方法ではないかと思います。

(次に螺旋形のスライドを見せながら) 私たちの一生を、例えば、出発点は小さく、生まれたての乳幼児から、こども時代を経て、青年期、成人へとぐるぐる回りながら大きくなる渦巻き状のモノと例えたとします。学生に、「渦巻きの元の部分、乳幼児期を覚えていますか？」という問いかけをしますが、この時期の自身の記憶はみんな消されているので、第三者として乳幼児を「観察する」ことだけが手がかりになるでしょう。次に幼児期の記憶は、と聞きますと、こちらは多くの学生が覚えていて、その当時の話が出てきます。いろいろな渦巻きが人それぞれの内にありますよね、と、複数の渦巻き図も提示できます。

「だれもがみんな、こどもだった私がいて、今の私がいる」というタイムトラベルをしながらの振り返りは、「幼稚園の先生になりたい！」という学生を対象としたアートの授業には有効だと思います。こどもだった頃の私は何をしていたか、何を見たか、どんな匂いが好きだっ

たか、などを思い出してみる、そしてそのプロセスから、つくってみたいな、やってみたいな、表現して、伝えたいな、というものを見つけて表現する、そんな方法があることにも気づいていきます。

具体的に、「こどもだった私→発表する今の私」の間に沢山詰まっているモノ・コトを、例えば山、歌、食べ物等を、自分の引き出しの内から外に出していきます。その過程でインスピレーションが生まれたら、制作の題材のヒントになっていきます。こども心、こどもの持つ五感とは、を意識し、発想から構想、展開へと進めていくと、時間の繋がりが出てきて、制作がより面白くなっていくのではないのでしょうか。

ここに、アートを学ぶ上で欠かせない3つのエクササイズを紹介したいと思います。一つ目は、「よく見る」ということです。自分の目で見ると、自分がどのように感じているかということも合わせて、よく見るということです。二つ目は、「言葉に出して言う」ことです。自分の周りに浮かんでいるアルファベットを引き寄せて言葉を紡ぐような感じで。言葉に出すということは、同時に「よく聞く」ことでもあり、人の話をよく聞くことはもちろん、自分で自分に言い聞かせる言葉もよく聞かなければならないと思います。三つ目は、「何が伝わったか？」どの立場で、誰が、何をいつ見るか、によって伝わるのが異なることです。ルビンの壺の図はトロフィーに見えたり、2つの向かい合う顔にみえたりします。どれが正しいとか間違いという解釈ではなく、どこに目を向けているかによって見方が変わる、つまり現状は現状としてあるのであり、良いとか悪いとか、上手下手の評価はここではないことがわかります。

このようなエクササイズの後、もう一度「こどもだった私」と「発表する今の私」の間を振り返り、「自分が、誰と一緒に」「何(テーマ)を」「なぜ」「どうやって、何を使って(素材)」「いつ(時間)どこで(環境)発表したいか」というキーワードを考えながら、制作を進めていきます。

ワークショップ「形をさがそう」

近江:次に、新聞紙を使って「形をさがそう」というテーマのワークショップをここで紹介します。日本語の新聞ですと、皆さんは自然に記事を読み読みなさると思いますので、今日は皆さんが読むことのできない外国語の新聞を用意しました。この「記事が読めない新聞」の中から「形」を探してもらおうと思いますので、こどもになったつもりで制作に取り組んでください。

まず、この新聞の紙面の中から皆さんが見つけた形、見立てた形を、用意した筆とアクリル絵の具の具の一角で示してみてください。紙面の別の場所に新たな形を見つけたときには、前に見つけた形と組み合わせて一つの形にしてもらっても結構です。次に、その形の輪郭だけでなく、中をアクリル絵の具で塗りつぶしてください、その時の色は輪郭線の色と同じ色でも別の色でも結構です。10-15分でできますか？

制作をしてもらいながらこどもの作品の例を紹介したいと思います。これは(図5)ニューヨークのモンテッソーリ小学校の2年生の作品ですが、このこどもの場合はこのような形を紙面の上に見つけました。これ(図6)はニューヨークタイムズの「旅行欄」の紙面なのですが、ここにはもともと素敵写真がありました。でも写真全面にベタベタと色をぬってしまっ、フットボールのコートと鳥の形を描きました。またこの作品は「ルイジアナ」という文字だけを囲んでいます。私たち大人には「旅行欄」「ルイジアナ」という字が読めますが、こどもはまだ2年生ですので内容まで読んで理解することはできません。子どもは、「新聞」ということはわかっていますが、書かれている文字は文字としての意味はなく、紙面上の単なる空間の中に広がるものとして見ているので、その文字段落の隙間には、例えば、このワニの上に立っている怪獣(図5)のように、自分の描きたいものを自由に描き、塗っていく全く自由な発想が生まれます。

なぜ何も描かれていない新しい紙ではなく、このような新聞紙を用意し、新聞紙を使うのかといいますと、何も描かれていない真っ白な紙に自分で何かを描くということは、とても勇気のいることだからです。特に慣れていないこどもにとっては。それに比べ、新聞紙のようにすでに文字や写真がついている紙の上なら、見立てをしながら、気楽に描き始められるようで、こどもは、この創作活動の出発点で、それほどプレッシャーを表すこともなく進めていきます。

今日、ここに用意したタイ、韓国、インドの新聞ですが、この新聞を大学の授業で配った時、学生は、「えー、こんな新聞をどこから集めてき

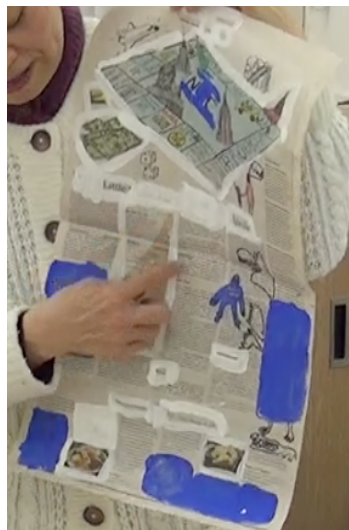


図5 2年生の作品①



図6 2年生の作品②

たのですか」と驚いていました。実はこれらは図書館から頂いた廃品の新聞です。図書館では、さまざまな国の新聞を購読用に用意しています。閲覧の終わった廃品の新聞をいただいたのです。「海外の新聞紙の閲覧が終わって古くなり始末したいときはお知らせ頂けませんか」とお願いしておりましたので、かなり集めることができました。

絵や写真が多く載っている紙面を開くと、どうしてもその「絵解き」を始めてしまいますよね。この練習の目的は「空間」「読めない文字」が並ぶ紙面の「見立て」なので、絵や写真のページは除きました。

アメリカのこどもは配られた新聞を見て「この新聞は気に入らない」とか「見立てを始めたけれどうまく進まないの、別の紙面に变えて」などと自分の不満を率直に述べるのが日常ですので、自ら「見立て」をしやすと思われる紙面を各自選んでもらう、ということもありました。日本のこどもや学生はそのような不満は直接先生に言うことはあまりありませんね。

このレッスンで使う色ですが、年令の低いこどもに白い絵の具を使わせると、なぜかわかりませんがとても興奮しました。面白い現象ですね。

日本の教室では、人の作品を見ながら制作すると「真似している」と言われたり、友達から見られることをいやがるこどもがいますが、アメリカのこどもは作品を見たり見せあったりしながら制作することはごく自然で、気楽に友達と学びあったり、高めあったり、グループ全員で面白い作品を作っていく様子がよく見られますね。互いに相談しながら、楽しく制作することは望ましいことだと思っています。

この授業をアメリカと日本で実践してみて気づいたことがあります。日本のこどもは「これを作ろう」と決めるまでは、手は動かさず、ひたすら考える時間がありますが、アメリカのこどもは、まず手を動かしながら考え、そうしているうちに「あ、こんな形ができた」「ああ、こんなことがしたかったとか、したくないことをやってしまったな」と学んでいくようでした。この行動の対称は印象的でした。「手を動かす」ということは簡単なのですが、教員が「手を動かしてみたら？」と口で言っても動かすことのできないこどもがいます。なるべく真っ白な紙や特別の紙ではなく、普段から生活の中にある新聞紙を使って「空いている所に色を塗ってみようか」と誘うと、こどもは緊張がほぐれて手が動かせるようになり、手が動かせるようになれば自分の考えが見えてくる、という運動と脳の間接関係がありますので、教員はまず、「こどもの手を動かすための誘い(導入)を考える」ことが必要でしょう。

「形を探そう」という課題で、「読めない新聞紙」を使うと面白い意外な「見立て」のアイデアが膨らみます。その一例を紹介すると、たとえば、同じ形の文字だけを絵の具で塗りつぶしていくという展開。時間が経つと紙面に点が散在してきますね、それはまるで「星座」のようにも見えて、それらの点を結んで人・動物などの形を作ることできます。また単に点を結んで形を作って「色で塗りつぶしてみようか」といいますと、一枚の新聞紙から、素敵な形と色が踊り出てくるような作品が生まれてきます。

A :制作にはどれほどの時間をかけているのですか。

近江:大学では90分で制作し、完成時にはみんなで合評をしました。新聞紙は同じサイズのものを使っていますので、タイルのように床に隙間なく並べて、何が見えるのか、と鑑賞を進めていきます。制作することにある種の恐怖感をもっている学生もいますし、またどう制作を始めればよいかわからないという学生もいます。また、「自分は絵が下手だ」と思っている学生もいます。そのような学生に対しては、「それは上手下手ではなく、その課題や、プロセス・アプローチ・構想が自分のものになっているかどうか、ということなのでは？」と言います。ただ、そのあたりを十分に理解してもらうまでにはかなりの時間がかかります。アートは自分の好みにあっていれば「好きだな」と近づきやすいと思いますし、あっていなければ「なんだか違和感を感じ、好きとは言えない」「結局関わりづらい、関わりたくない」となるでしょう。自分の思い、主観、作品をどう見るか、どう感じるかは、人によってかなり違ってきますよね。例えば、公募展で自分の作品が入選するかどうかは、その作品がその時の審査員の好みや目的にあっているか、という見解から出る傾向もある、と学生に伝えたりします。デザイン作品の課題にはあらかじめ目的や受け手が決められていることが多く、その目的を達成する力が作品にあるかどうか問われます。公募展で入選できなければその作品が目的・公募の趣旨にあっていなかったということです。次回は受け手を再度意識して作品づくりをすることが求められる、と伝えます。技術が身につけば、「上手、下手」という括りを超えたところ、つまり、審査委員、クライアントの嗜好で判断が下されることが多いことも学生には知ってもらいたいと思います。

近江:さあ、皆さん、出来てきましたか？ 時間がきてしまいましたので、皆さん手をとめてください。

B :白黒の新聞をカラー化しようとか、読める字だけに色をつけてみよう、ということは分かりやすいのですが、「形を見つけよう」という先生の導入の言葉はどのようなことなのでしょう。私は、たとえば写真のなかに円や四角を見つけたり、余白にある形を見つけることだと考えたのですが。また、もし「この新聞のなかには形がない。見つからない」というこどもがいた場合に、先生はどのように対応するのでしょうか。

近江:「形が見つからない」というこどもがいれば、それはそれで良いので、質問を変えて、「新聞のどこに最初に目が行ったかしら。そこに印をつけてみたら？」と声をかけてみます。

B :なるほど、そうすると「形を見つけよう」ということは、こどもに一つの「きっかけ」を与えるための言葉で、先生は「形を見つける」ことにはこだわっていないのですね。

近江:そうです。「形を見つけよう」という提案をすると、ほとんどのこどもは形を見つけてくれるのですが、「私には形が見えない」というこどもに「形」を説明しても腑に落ちないでしょう。ですので、そのようなこどもには、たとえば「好きな部分に○をつけてごらん」などと言った導入をすればいいと思います。

B:すぐに「できた!」というこどもにはどう対応すれば良いのでしょうか。

近江:そのようなこどもには新しくもう一枚の新聞を配ったり、使っている新聞の裏面をひっくり返して、ここにも試してみようか!と対応していけば良いと思います。

B:そうすると、先生はこどもに対して「・・してほしい。・・させたい」という働きかけは一切せずに、「いやになったら、いつでもやめていいよ」ということも含めて、こどもにすべてを任せるということなののでしょうか。

近江:そうですね。こどもにすべてを任せますね。教員の仕事はこどもが「これで十分、もうやめてもいいな」と思うまでの時間を確保することだと思います。

B:近江先生は「最初は単色で」とおっしゃったので、私は「作業」として「単色で色を見つけだそう」としていたのですが、もしいろいろな色が使えたのであれば、「作業」としてではなく「自分の画面をつくる」という意識を強く持てたのではないかと思います。

近江:この課題では、全部単色で塗込んだ学生もいましたね。

B:そうすると、ここでの「形を見つけよう」ということは、それぞれがどのように理解・解釈しても良いということなのですね。

近江:そうです。制作のときはどのように理解・解釈しても良く、鑑賞の時に自分の理解・解釈をふくめて、自分の制作についてできるだけ詳しく発表してもらいたい、と強調していきます。

B:まだ少し理解できないところがあるのですが。それは最初に先生が話された「アート」と「デザイン」の違いについてなのですが、この制作は「アート」なのですね。でも「四角を見つけよう」というのは「デザイン」としての課題ではないかと思うのですが。

近江:「四角を見つけよう」というのは、先ほどお見せしたチャートの[B]にはいることで、「四角や、その他の形を見つける」というのは、デザインではなく「見つける」という行為を意味しています。たとえば「三角形」は線が三本あればできる形ですが、「この部屋のどこに三角形があるかを見つけてみよう」とすれば、「よく見て、見つける」という行為が促されます。ここで三角形のコンセプトが明確になれば、その後の展開として、問題やオーダーを出すこともできます。例えば、「こんな三角形を使って、こどもが楽しく遊べるような、カッコいいおもちゃを作ることができる?」つまりここで、誰(対象)のために、何のために、何を作る?と、デザインの作業へと転換していくことができます。

では、一人ずつできた新聞紙の作品を黒板に掲示して、表現意図、制作過程、感想など、何でも結構ですので述べてください。まず学生に、この過程で、困った点や、感想など何でも発表してもらうことから対話を始めていますので、皆さんもご自由に何でもお話してください。

A:私は、この新聞紙を選んだときに、最初はこの形がおもしろいなと思っていたのですが、私は偶然修正液をもっていたので、その形を取り出す前にまず修正液をぬりはじめました。ぬりはじめると修正液では細かいマスが埋められることがわかったので、ずっとマスをうめ続けていました。でも「あと5分」といわれた時に、修正液をやめて画面全体を見直しました。そうすると、初めに気になっていた形がトンネルのような形に見えたので、トンネルを描きました。トンネルを描くと、この回りに山や湖がある方が感じがいいなと思い、余白の部分に描きました。余白だけでは湖の感じが表現できなかったのでつなげて塗り広げました。本当はもっと山や湖を描きたかったのですが。(図7)

福光:今のAさんの発表について、何かご意見ご質問はありませんか。

近江:この発表で私が大切にしていることは、発表の内容ではなく、自分が思ったり感じたりしたことを皆の前で発表するということですので、あとの方もそのおつもりでお話してください。

C:私はハングル文字をまったく読めないのですが、この紙面を見ていると○が多いなあと思いましたので、○を集めようと思いました。そこでこのあたりから○の部分のぬっていききました。そうしているうちに、大きな○もほしいなあと考えたので、大きな○を自分で描いてそれをつないでいくと星座のように見えてきました。その時モンドリアンの『コンポジション』を思い出したので、画面を分割してそこにできるだけ原色に近い色をぬりました。(図8)

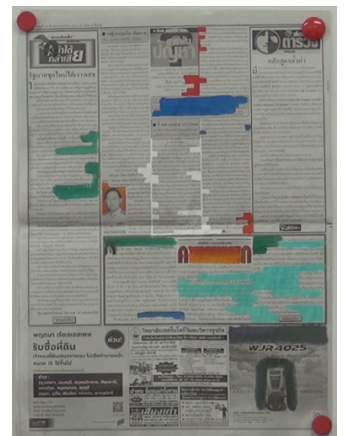


図 7

D :私の新聞には、満面の笑みでハグをしている人の写真がありました。私は「ハグ」を強調したかったので人の顔の印象を薄めるために、顔の部分は塗りつぶしたいと思いました。そして、二人の人が歩み寄っているところをドライブラシで表現してみました。人の形と下の写真をつないで自然とのつながりを表そうとしてみました。先ほど「白は人を興奮させる」と伺ったので、私もすこし興奮してみようと思い、このようにしました。(図9)

B :この中で私の目についた形は四角と丸でしたので、最初にそれを描きました。つぎに別の形をさがしたのですが、見つからなかったので余白をつないでいくと下の部分のような形になりました。つぎに、これは新聞なので色をぬるとその部分が読めなくなってしまうので「それならいっそ読めなくしてみよう」と思いました。そこで、まず読める字だけを残して残りの字を消そうとしました。読める字は数字だけだったので数字以外の字に絵の具をぬって消そうとしたのです。そこまではオレンジ色を使っていたのですが、別の色も使いたくなかったので、オレンジの補色の緑色の線でぬっていきました。最後の方は遊びました。(図10)

E :最初はこのあたりに青色の線を引いて、下には茶色をぬったのですが、茶色をぬっている時に「あ、一色しか使ってはいけなかったのだ」と思い、茶色の上にもう一度青色をなぞってぬったのですが、二度目の青色が最初の青色と少しちがう色になっていることに気づきはしましたが、そのままぬっていきました。つぎに、ぬった線にくっついていっているところに色を塗り、新聞本文の文字と大きさの異なる文字をつぶそうと思い、色をぬっていきました。(図11)

F :私の新聞紙の面はこのように人の顔と写真ばかりで、「ワッ、ミズって気持ち悪いな」と思いながら、この紙面には最初から色と形があるので避けました。新聞紙を広げて塗り始めたところで先生の指示がありましたので、小さくすることをやめ広げていきました。この部分が車の形に見えてきたので、車の形にしました。そうすると道路も作りたくなったので「大きい方がいいや」と思い、道路をどんどん延ばしました。そして、この大きな字のところに道を作っていくと「あ、立て札もあったなあ」と思いました。そのあたりから自分の世界に入り込んでしまい「道に色がついていれば可愛いかな」、「あ、ここには草もあるなあ」、「あ、私は右利きなので描いたものの向きが全部左向きになっているなあ」などと思いながら、この魚やもう1台のトラックも描いていました。(図12)

ここに来る途中、目にホコリが入りとても痛かったのですが、その痛さも忘れて制作に熱中していました。大変楽しかったです。



図 8



図 9



図 10

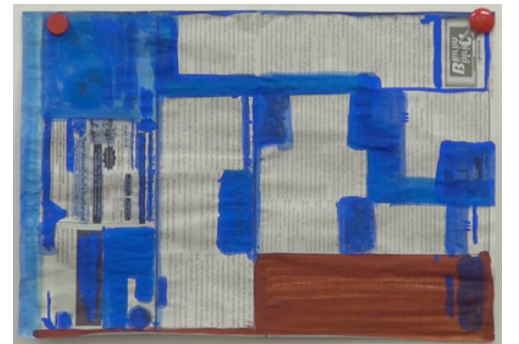


図 11

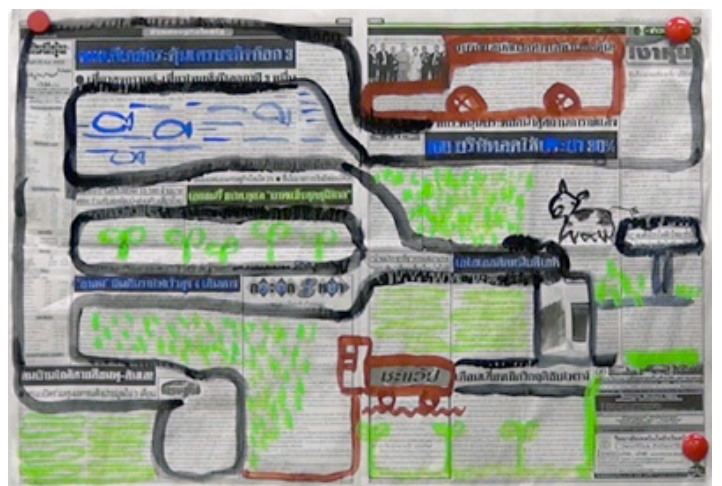


図 12

G :私は、本当に幼稚なのですがこの文字がレースに見えました。そこで、色っぽいドレスを作ろうと思いました。女性のスタイルをよく見せたかったのですが、首は細く描くことができました。バッグを持たせ、エメラルドの指輪も描きました。(図 13)

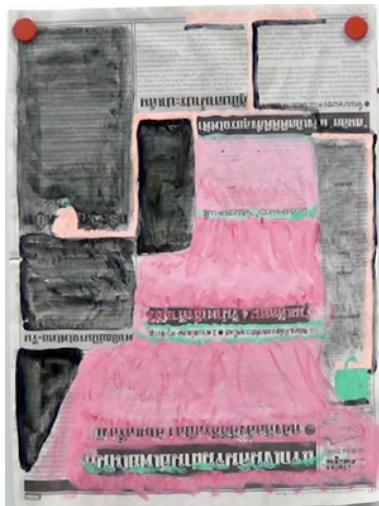


図 13

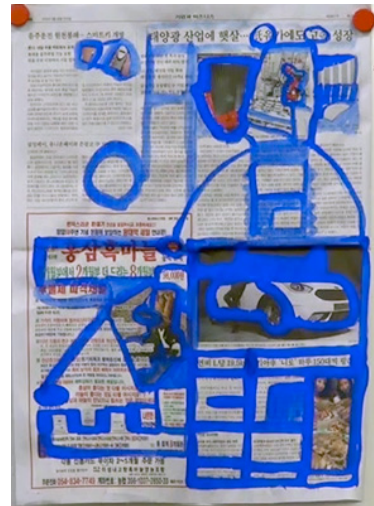


図 14

近江: 言い出しっぺの私の作品がいちばん稚拙かと思うのですが、私がこの新聞を見たときに赤がすごく多かったんで、使う絵の具はブルーだけにしようと思いました。そして、形は四角とか三角とかのきまつた形ではなく、写真のなかの部分部分をむすびながら形を作っていました。また、私も○が気になりました。また、「あ、そうだ、ゴジラの映画を見たときにはこんなだったなあ」と思いながら、ドラゴンのような怪獣が建物の上に乗っている絵を描きました。(図 14)

近江: 私が学生に対しておこなった「形をさがす」という題材は今皆さんにやっていただいたようなことだったのですが、「形」という点では四角や三角という幾何学的な図形ではなくオーガニックな形もありましたので、よかったと思います。「何かの形を捜しながら見つけていく」という導入の部分で、学生のなかにはまったく形を見つけることのできない人もいます。そのような人は「できない」→「やりたくない」→「やらない」→「嫌い」ということになってしまいますのですが、そのような人は、何も描かれていない真っ白な紙をもらって「こんな何も描かれていない真っ白な紙に、自分は何ができるのだろう」と戸惑ってしまい、不安・恐怖を感じます。そこで、そのような人には、真っ白な紙ではなく、あらかじめ何かがかかっている紙を準備した方が表現にとりかかりやすいと思います。「塗り絵」もその条件に当てはまるのですが、「塗り絵」は誰もがすでに経験していることなので、初めてのことにだれでもが感じるワクワク感がありません。今までだれも経験していない新聞紙を準備することで、落書をするときのように気持ちをほぐして気楽に制作に取り組んでもらえるようにしました。また、このワークショップは、最初は色をぬったところに意識が向かうのですが、ぬり進んでいくと色がぬられていないところに意識が向かうようにもなるという「図と地の逆転」という方向への発展が可能であるとも思っています。

学生の制作は個々それぞれの方向に向かって進められるのですが、私はどのような方向に向かっている作品に対しても「ああ、それもいいね」と言うことにしています。そうすると、そのうちに「先生、それでは何でもいいのですか」という質問がでてくるので、そのとき初めて私は「いえ、そうでもありません」と答えて、そこから「個々の作品」についての話をするにしています。ここで重要なことは、学生が「何でもいいのか」と意識するまでは自由に制作させることだと思っています。そして、「何でもいいのか」という意識が芽生えた後から、少しずつ問題をしばっていく方法を私はとっています。

こどもの作品紹介 (※Web 報告では写真は省略しています)

最後に、アメリカのこども達の作品を少しもってきていますので、その説明をさせていただきます。

1. これは、こどもが初めて数字が書けるようになった直後の作品です。今のこどもにとって身近な数字はスマートフォンのスクリーン上に出てくる数字ですので、このようにまず画用紙にクレヨンで数字を描き、その上から水彩絵の具で色をぬって数字を浮かび上がらせる魔法のようなプロセスがこどもには新鮮だったと思います。
2. ニューヨークにはたくさんの教会があり、教会にはステンドグラスがありますので、教会にステンドグラスを見に行くことから始めます。まず「黒のインクでできるだけ多くの線を書いてみよう」と提案し、つぎに「線と線の間に色をいれてみよう」という順序でできたのがこの作品です。
3. これはコラージュですが、ここではまず「線」の導入をし、つぎに「色」の導入をしました。そこで、雑誌のなかから「緑色」のものを見つけだし、それを自由に合わせながら自分なりのデザインを制作させました。
4. これは「2つのコートを橋でむすぶ」というテーマの作品です。布を机の上にストレッチして固定しておきました。描きたい時にその布の上に描けるように。ほとんどのこどもは2つのコートを「橋」でむすんだのですが、橋が描けないこどもは橋で結ばなくても、右端と左端へ、上と下へなど、つないでいけば良い、という課題でした。
5. これはコラージュで、雑誌のなかから自分の好きなものを選んで「自分の部屋をつくる」というテーマでおこなったものです。
6. これは、皆さんも実践されたことがあると思いますが、画用紙にまずクレヨンで絵を描き、つぎにその上全面に黒クレヨンをぬります。その後、クギなどを使って真っ黒な画面をひっかきます。すると、下から最初に描いた絵があらわれるというものです。なぜここに「象」が描かれているかといいますと、このときこども達はちょうどインドの勉強をしており、みんな象を描きたがっていたからです。

7. これは、私が雑誌の中から目の部分だけを切り抜いて、紙にアトランダムに貼り、その目を線でつないだ顔をつくって「お面にしよう」という課題から生まれた作品です。ここでは「目をつなぐ線は、しっかりと初めから終わりまで描いて、と指示しました。そうしませんが、画面がわかりづらくなってしまふからでした。

質疑応答

A : 「形を見つけよう」は何年生を対象におこなったのですか。

近江: いろいろな学年でしましたが、できた作品は学年によって異なっていました。幼稚園の年長や小学校1年生の作品はとてもおもしろかったのですが、5年生ぐらいになると堅い感じの作品になっていました。

A : どの学年に対しても、導入は同じようにおこなったのでしょうか。

近江: 年長と1、2年生には同じ導入をしました。まず新聞紙を配り「この新聞はみなさんには読めないと思いますが、この中にはどんな形が見えますか」と質問を投げかけると、「空がある」「写真がある」「写真が三つある」「僕の中には写真がない」などいろいろな答えがかえってきました。そこで次に「この新聞はおもしろいかなあ」と聞くと「あまりおもしろくない」という答えがかえってきたので「じゃあ、この新聞をおもしろくしてみようよ」ということで始めました。つぎに「この新聞のなかには見えない形が眠っているかな？」と聞くと「ここに丸い形が見える」「ここに四角い形が眠っている」などと口々に答えましたので、「じゃあ、一人ずつ見つけてみよう」というのが5、6、7歳のクラスでの導入でした。

高学年では「写真の内容に注意をはらわず、形だけを見ると何かの形が見えてくるかもしれないね。」というような導入をおこないました。ちなみに、5、6年になると、人物や人の顔に興味を持ちます。

B : 新聞紙は身近にありますし、こどもも興味を持ちますので、私もよく使いますが、高校生でも新聞紙に興味をもつものでしょうか。

C : 高校生でも興味をもつと思います。高校生では絵が苦手という人も多いので、このような活動は面白いのではないかと思います。

近江: 高校生に対しても、字が読めない外国の新聞に対しては「わー、ぜんぜん読めない」「こんな外国の新聞をどこからもってきたの」ということをきっかけに、興味をもたせることができるのではないかと思います。

G : 日本のこどもは、自分の作品が良いのか悪いのか、上手なのか下手なのかという自分自身の判断以外に、「先生はどう思っているのか」という先生の評価を知りたいがる傾向が多いと思うのですが。

近江: 私は「良い悪い」ではなく「すてき」とか「これ、自分の気分には合うな」「これ、もう少しおしゃれにできないかなあ」、あるいは、「これは少し寒い感じがするけれど、これで良いの」というような、こなれた言葉で表現をすることを心がけています。こどもが、もし「僕は寒い感じが好きなのでこれで良い」と言ったときには「寒い感じをだしたかったのね、その感じが先生にも伝わってきました」と対応します。

G : 日本では小学校から英語教育が導入されるようになってきているのですが、英語を学ぶときには体を動かしながら英語を聞くと覚えやすいという話を聞いたことがあるのですが。

B : 私が大阪市の小学校に勤務していたときに、小学校では日本で初めて英語教育の指定を受けたのですが、そのときから料理をさせながら英語を学ばせるということはすでに始まっていました。ですから、現在は「体を動かしながら英語を学ばせる」という指導法はかなり進んでいると思います。

福光: 他にご質問はありますか。

A : 最初に見せていただいたパワーポイントに「教育」「こども」「アート」「デザイン」という言葉があったのですが、そこで「こども」という字だけが他の三つの字と異なっていたのですが、何か理由があるのでしょうか。

近江: 私の所属している学科は「こども芸術学科」で、私たちは「こどもも一人の人間として対応する」ということを基本に考えています。ですから「一人の人間としてのこども」に対する「教育」「アート」「デザイン」ということを意識して、パワーポイントの画面のレイアウトを作りました。

A : 「教育」「アート」「デザイン」の三つには順序があるのですか。

近江: こどもが基本にある、ということ以外に順序はありません。

B : 「アート」と「デザイン」が並列にならんでいるということに、私は多少違和感を感じるのですが「デザイン」をとってしまって「こども」「教育」「アート」ではいけないのでしょうか。

近江: 学生の就職希望では「アーティストになりたい」のか「デザイナーになりたい」のかということが問われてきますが、「アート」は自分が思ったり感じたりしたことをそのまま表現することが前提になっています。しかし「デザイン」は作品を対象の人に使ってもらったり、対象が持つ問題点が解決され、改善されていることが前提になっていると言ってもいいと思います。たとえば、私が作品の個展をするときはだれかの注文でつくった作品を展示するのではなく(コミッションは例外ですけれど)、自分が思ったり感じたことをそのまま表現した作品を展示します。アーティストは、自分の作った作品をたくさん出品しても、そのうちのどれほどの作品が売れるかわからないので、ずいぶん無駄が多い、などとも言われるところです。耳にする言葉では、「アーティストは デザイナー とは呼ば

れたくないと思っているが、デザイナーは デザイナー と呼ばれても アーティスト と呼ばれてもあまりこだわりのない」というのがありますね。

G : 日本語と英語では「アート」「デザイン」の意味がちがうのでしょうかね。

A : 日本語では、「アート」を「自分で考えたことを、自分で創作・創造する」という意味でとらえたときは、「デザイン」も「アート」なのですが、近江先生のお考えでは「アート」は「純粋な表現」で、「デザイン」はそうではないというような意味なのでしょうね。別の視点からいいますと「デザイン」も、「アート」の一部としてだけ考えるのではなく、たとえば「ライフデザイン」とか「プロジェクトデザイン」のように広い意味でとらえるべきだという考え方もできると思います。

B : 最初に説明された「A」と「B」という分類なのですが、この分類は以前からあった考え方なのでしょうか。

近江: はい、モンテッソーリの考え方です。

B : 日本の学習指導要領と比較して考えてみますと「A 表現1」の「造形遊び」が「A」で、「A 表現2」の主題をもとに絵や立体・工作に表現する活動が「B」だとすると、A の解釈がまずくなってきました。すなわち一般的には「A」は「B」にいくまでの前段階で、材料について考えたり、技術を身につけたりする「造形遊び」だと理解されているのですが、私は「A」は「B」にいくための準備段階ではなく、「A」だけで独立した表現・題材になりえるものだと理解しているのですが・・・。

近江: そうです。ただ、たとえば「風景画を描きましょう」という大きな課題を直接こどもに提示すると、こどもは鉛筆や絵の具、紙などの材料用具の使い方が分からないので、どうしていいのか困ることになりますので、まず材料用具の特徴や使い方はしっかり教えておこうということです。

B : そうすると「B」に進むためには、その前に「A」を修得しておかなければならないとい考えなのでしょうか。

近江: はい。私はまず「A」を指導してから「B」に進みます。たとえば、先生が土粘土を扱いたいと思ったときには、こどもにまず土粘土の特性に気づいておいてもらう、その導入があるとその後の展開がしやういと、考えています。

B : たとえば今日はアクリル絵の具を使ったのですが、こどもはアクリル絵の具の特性を知らなくても今日の制作はできたと私は思うのですが。あるいは、こどもは材料の特質についてあらかじめ知らない方が、制作の途中にさまざまな発見があるのでおもしろいと感じることもあるのではないのでしょうか。

G : 題材や材料によっては、何も知らなくて制作したり使ったりした方がおもしろいということもあるのでしょうかね。

B : そうです。ですからいつもまず「A」を知ってから「B」に進まなければならないということないと思います。

D : 私は、たとえば土粘土の場合、素材としての土粘土に興味をもたせることを目的とした授業であれば、直接「B」をおこなうことも良いのですが、もし何かの作品を制作させるという目的の授業であれば最初に「A」、すなわち土粘土の特性についてもわかっていると良いと思います。

G : 書道の場合には、材料用具の特性については、経験するなかで徐々に理解させるという考え方で指導しており、材料用具だけを取りあげて説明するということはしていませんので「書道では材料用具の説明がしっかりとできていないなあ」という思いながら今のお話をうかがっていました。最初から材料用具の説明をすると、せっかく「字を書こう」と思っていたこどもの意識が材料用具の方に向かってしまうので退屈するかもしれませんが、ある程度字が書けるようになったときには材料用具の説明を一度きちんとしておくということは、書道でも考えてみるべきことかもしれないと思いました。

H : いまの福光先生のお話をもう少し詳しくしていただけないでしょうか。

D : 書道では筆、墨、紙を使うのですが、たとえば筆には竹筆とか毛筆とかいろいろな種類があります。そこで私は、竹筆を使うとこのような線・表現になり、毛筆を使うとこのような線・表現になるということを、適当な時期をみはからって生徒に指導しています。

墨と紙につきましてもいろいろな種類がありますので、同じように書いたとしても、墨や紙の種類をかえると字はまったくちがったものになります。そのことは教科書にものっていますので、生徒がある程度書けるようになり「自分自身の表現をしてみよう」と思ったときには、自分の表現したいものを選ぶ範囲を広げさせるために、さまざまな種類の筆、墨、紙の特徴を知らせて書かせてみるということをしています。

G : 「墨の濃さ」についても「墨は黒いものだ」とのみ思っている人も多いのですが、たとえば水のなかに1滴だけ墨をたらすとこんな色になるとか、墨の濃さによって字の線のにじみ方がちがうとか、線を重ねるとこのような効果がでるといようなさまざまなことを、一つずつ取りあげてこどもに知らせると、こどもの発想、意欲は材料の組み合わせのバリエーションに比例して高まっていくかも知れませんね。

H : 図工・美術の場合には「まず材料の特徴を知らせてから表現させる」という考え方と「表現しているうちに材料の特徴は学べるので、まず表現させる」という両極端の考え方があり、個々の先生はその間のどこかの考え方で指導していると思うのですが、F 先生はどのようなお考えで指導されていますか。

F : 私は「まず、楽しさありき」という考え方、つまり小学校段階では「こどもが楽しく表現できる」ということを第一に考え指導しています。

B : F 先生は「最初に知識をつめこむ」のではなく「こどもが必要としたときに知識・技術を教える」ということなのでしょうね。

F :そうです。最初は材料用具の簡単な使い方だけを説明しておいても、子どもが楽しんで表現に取り組んでいるうちに、かならず「こうしてみたい」という新たな気持が生まれてきますので、そのときに初めて必要な知識・技術を指導してあげるといことです。

B :そうです。たとえば子どもが「ここには絵の具のチューブにはいつている緑色ではなく、もう少し明るい緑色が使いたいのだけれど、その色はどうすれば作れるの」と聞いたときに、先生は初めてその色の作り方を教えるといことです。

近江:導入では、その「タイミング」が鍵になっていると思います。子どもが本当に必要としているタイミングを逃さず指導すると、それはすばやく確実に子どもの身につくでしょう。ただ、一人ひとりの子どもはそれぞれ違った見方や感じ方をしていますので「必要とする時期」はそれぞれ異なります。ですからクラスが大きくなればなるほどそのタイミングをとらえることは、先生にとっては易しくはないと思います。

これは別の話ですが、最近は「美術館のワークショップ」「・・・のワークショップ」というようにさまざまな「ワークショップ」が開かれています。が、「ワークショップ」と「授業」の違いについても少し考えてみたいで。ワークショップに参加した子どもの感想で、「ワークショップはとてもおもしろかった、楽しかった」を頻繁に聞くことができます。ですので、ワークショップは、子どもの日常の中のイベントとして刺激があり良いのですが、「授業」は、ワークショップとは違ひます。イベントのような一回限りの単発な出来事ではなく、毎週のように、決められたスケジュールの中で回を重ねて進んでいきます。つまり、繰り返しや振り返りをしながらの継続性があり、その過程で一回ごとの授業の関係性が結ばれることが重要で。子どもが日々の生活のなかで「ああ、先週の授業はこのようなことだったのか」というように、継続性のある流れの中で、その授業の最終目的や狙いの「全体像」が包括的に理解できるものでなければならぬと思います。授業をする教員は、イベントの開催者ではないので、まず、これを導入しここで疑問を引き出し、指導して「ここでは以前の授業の体験を振り返らせて」・・・というように、長期的な視点・指導計画のなかで、進めていくといことが必要で。私も地域を変えてワークショップをしますが、その場の花火的なイベントになる傾向があつて、その後、参加者の心の中や生活の中で何が展開されたのかを振り返ったり共有することがほとんどありません。

D :私が通っていた幼稚園はカトリック系の幼稚園だったのですが、私が入園したときにモンテッソーリ教室ができました。そこでは日本の他の幼稚園では経験できないようなさまざまな経験をさせてもらったので、今でもよく覚えています。

E :私は今年の春から附属小学校で図工の専科としてお世話になっているのですが、それまでは新卒以来の公立小学校で学級担任として勤務していました。その学校には図工室がなかったので、図工室で授業をするのは初めてのことでした。子ども達は図工室に準備されているものをよく知っていますので、私が知らないものでも「先生、あれちょうだい」と言ってきます。いろいろな材料用具を使うことはもちろん良いことなのですが、その反面、私は「今あるものを工夫して制作する」といことも大切だと思ひのですが、近江先生はモンテッソーリ学校では材料用具の準備をどのようにされていたか。

近江:私は二つの違ったタイプのクラスをもっていました。その一つは時間割にある美術の授業のクラスで、そこでは私が準備した材料や道具を使って制作するといものでした。もう一つは放課後子どもが好きな時に来て好きなものを自由に制作するクラスで、そこではモンテッソーリの教育法に従ひ、子どもはアトリエの棚から自分の必要とするものを自由に選んでトレーの上におき、自分の作業机に運ぶ、そこでその選択したもので自分なりに表現するクラスでした。

E :図工専科をして初めて気づいたことは、学級担任の先生と話す機会がまったくないといことなのですが、近江先生はどのようにされていたのでしょうか。

近江:私の方から学級担任の先生方に話しにいかなければ、子どもが、今日何を学んでいるかの情報がなかなか取れません。私はできるだけ学級担任の先生と話しに行くことを心がけていました。学級担任の先生をたずねていくと、はじめのうちは、難しそうな様子での対応もありましたが、人間関係ができてきますとそのときに学習している教科書や資料などを臨機応変に、気さくに見せてくれるようになりました。

E :なるほど、分かりました。私もできるだけ学級担任の先生のところにお話をうかがいに行くことにします。

近江:是非そうしてください。専科の問題点は、美術・図工・芸術の専科の常勤が学校にいますと学級担任の先生は、専科の先生に任せっきりになり、関心が薄くなってしまうこと。そこで、私は一ヶ月に一度学級担任の先生に集まっていたき、美術・図工の授業の話をしたり、連動教科のヒアリングの機会をあえて作っていました。

福光:それでは時間がきましたので、近江先生のご発表に対する質疑応答はこのあたりで終わります。近江先生ありがとうございました。

参考文献 :

- ・ Montessori, Maria 2012/2015 *The 1946 London Lectures*, Edited by Dr. Annette Haines. Mont-Pierson Publishing Co.
- ・ Montessori, Maria 2006 *The Montessori Method*, Edited by Gerald.L.Gutek, Translated by Anne E. George Rowman&Littlefield Publishers Inc. USA
- ・ モンテッソーリ、マリア 2010 『モンテッソーリ教育の実践理論』 クラウスメール/江島正子(翻訳) サンパウロ社
- ・ Lillard, Paula Polk and Lillard, Jessen Lynn 2003 *Montessori from the Start*, Schocken USA

第2部「美術教育・グローバル・プロジェクト」について

渡邊美香(大阪教育大学)

はじめに

これから発表させていただく「美術教育・グローバル・プロジェクト」については、先日11月18日に台湾の屏東大学で開催された国際学会 2016 International Conference on New media creation, Visual communication design and Art exhibition で招待講演をさせていただきましたパワーポイントをそのままお見せする形で進めていきます。屏東大学は、大阪教育大学との学術交流協定締結校であり、毎年美術教育専攻の大学院生を中心に交流を進めてきました。今年度屏東大学がはじめて視覚芸術系を中心に国際学会を立ち上げたということで、アジア地域を中心とした国々、ベトナムやラオス、韓国、中国本土などから先生方を集め招待講演が行われました。日本からは私が参加させていただきました。発表題目は「日本の美術教育における国際交流の現状—大阪教育大学美術教育講座の取り組みから—」で、今回は、その内容を紹介させていただきます。発表は、1. 国際交流の取り組みの背景 2. 芸術を通じた国際交流の可能性 3. 成果と課題 の3項目になります。

1. 国際交流の取り組みの背景

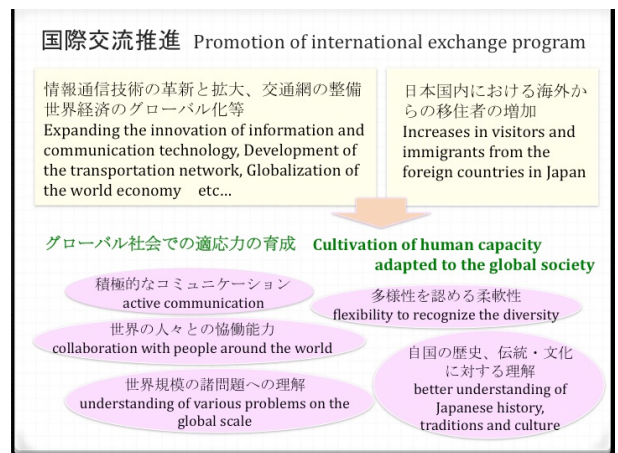
今日、日本の高等教育の重要課題の一つとして国際交流が推進されています。この背景には、日本の社会の変化があります。この社会の変化とは、情報通信技術の革新と拡大、交通網の整備、世界経済のグローバル化に由来する今後の社会像と、日本国内に置ける海外からの移住者の問題といった地域社会の現状に見られる、グローバル化と呼ばれる社会のことです。この社会の変化に対し、教育も変化しなければならないということで、第3期教育振興基本計画(中央教育審議会)では、このようなグローバル化に対応する教育(将来の教員の育成)の重要性について掲げ、育成されるべきグローバル社会での適応能力を次のように述べています。

今後、グローバル化の一層の進展に伴い、多様性を認める柔軟さを持ちつつ、世界の人々と積極的にコミュニケーションを取り、協働・共生する姿勢を養うこと。国際社会の中で、(中略)日本の歴史、伝統・文化に対する理解を深め、様々な国の人々と理解し合い協働できる姿勢を育むような教育が必要。

私の勤務する大阪教育大学は教員養成大学ですので、このような状況に対し、将来教師となる学生がグローバル社会に適応する能力をその子どもたちに育ませるために、彼ら自身がまず適応能力を身につけることができるような大学、大学院での授業を学ぶことはできないかということで、まず大学、大学院での国際交流の機会を作ることを考えました。2013年5月に美術系の学部と勢いのある屏東大学との学術交流協定が締結されたことは、このような取り組みを進める大きなきっかけとなりました。

美術教育講座では、学長裁量のプロジェクト経費を受け「美術教育講座・創造力アップ・グローバル・プロジェクト」を数年にわたり実施してきました。本プロジェクトは、大学院開講科目「現代的教育課題とアート」の枠で、平成25年より、教員を目指す学生が、現代の美術や教育の課題について関心を広げ、表現、企画、コミュニケーションの能力を育成することを目的として取り組みました。

大阪-屏東間は、直線距離にして1980km、高雄までの直行便で約3時間程度で行くことができ、時差1時間というロケーションは、気軽にお互いに行き来することができ好条件となっています。最初は、屏東大学の教員学生が大阪教育大学に来ました。交流はお互いウィンウィンで進めたいと思っていましたので、来ていただいたので、こちらからも訪問しようということで、その年学生を連れて屏東大学を訪問しました。それから毎年、こちらの希望に応えた交流プログラムを屏東大学側でも提案下さっていたので、今度は大阪教育大学へも招待したいという思いで、今年の3月に屏東大学の教員学生を大阪に呼びました。このような形で交流は続いています。



大阪教育大学と屏東大学の学術交流
Academic exchange program between 2 university

年度year	場所place	交流人員 numbers (teacher/student)
2013	大阪 Osaka	教員3名 学生18名
	屏東 Pingtung	教員2名 学生7名
2014	屏東 Pingtung	教員2名 学生9名
2015	屏東 Pingtung	教員2名 学生4名
2016	大阪 Osaka	教員2名 学生7名
	屏東 Pingtung	教員3名 学生9+α名

屏東Pingtung 大阪Osaka
直線距離1980km

国際学会では、ここで一応大阪教育大学の紹介をしました。3月に訪学した屏東大学の学生には懐かしい風景にうつったかと思いますが、柏原キャンパスへは、長いエスカレータを3台も乗り、山の上まで行くことや、山の上の展望のよさを写真で紹介しました。

2. 芸術を通じた国際交流の可能性

本プロジェクトを実施する上で、国際社会に適応した能力の育成と、芸術を通してできることとの関係について考えました。授業の最初に言葉の通じない相手とどのようにコミュニケーションをとることが可能か、学生に考えてもらうのですが、その時多くの学生は絵や写真、絵本や絵巻等で伝えるのがいいのではないかと意見を述べます。言葉の通じない状況では絵や画像等を用いることで国際社会に適応した能力の一つ「積極的なコミュニケーション」が期待できる、これは、芸術(アート)の一つの可能性と考えることができます。また、芸術は人が手や体の感覚をもとに形を作り上げ、表現することですので、人間誰もがができることと考えると、その場で一緒にできる芸術活動を通して、「人と協働する力」を育む可能性も考えられます。作品を見て自由に感じたことや考えを語る鑑賞活動においては、自分と異なる見方感じ方を発見することにより、「多様性の理解」につながることで、同時に「自国の歴史、伝統、文化への理解」が深まることも芸術の可能性として考えることができました。これまでの交流を振り返りながら、「芸術を通してできること」のこの3点(スライド参照)を中心に芸術を通じた交流の可能性や、学生たちが身につけた国際社会への適応能力について見ていきたいと思います。

芸術を通じた交流活動として、自己紹介スライドショー、展覧会等での芸術鑑賞、ワークショップの3つの取り組みから見ていきます。

まず、自己紹介スライドショーですが、これは交流を始めた当初から毎年学生一人ひとりが作成しているものです。授業の最初に言葉の通じない相手とのコミュニケーションの方法を尋ねた時、絵や写真が有効であるという意見が多く出ましたので、それであれば絵や写真で自己紹介しようということで始めました。一人 10 枚以下(そのときの受講生の人数に応じてあまり長くならない程度)で作成し、大学での制作や研究、キャンパスライフや趣味、興味のあるもの等を絵や写真で伝えるよう工夫しました。自己紹介スライドショー作成後の学生の感想では、「自分の興味関心を整理した」、「覚えてもらえるよう顔や全身、作品を採り入れた」、「共通文化である漢字や英語を使った」、「内容が伝わりやすくなるようシンプルにした」、といったものが見られました。屏東大学学生が来阪した際、同じように自己紹介スライドショーを準備してくれました。立場を変えて見ると、自己紹介スライドショーとは学生一人ひとりを記憶する上で有効な方法であることが改めて実感されました。

次に展覧会等での芸術鑑賞活動を見ていきたいと思います。交流の中では、互いに作品展を開催し、作品を紹介し意見交換をする活動を行ってきました。羨ましいことに、屏東大学には大変立派な作品展示スペースがあります。スライドは、2016 年 3 月に大阪の海岸通ギャラリーCASO で美術教育講座教員と学生卒業生とで開催した「Work on paper/ Work of paper 一紙による造形」展に、屏東大学の学生・教員を招いた時の様子です。出品作家との意見交流会では、和紙、クラフト紙、新聞紙、コート紙など紙の素材の違い、切って組み合わせる、ちぎる、丸める、膨らませる、皺を寄せる、染める、滲ませる、曲げる、光を通すなど多様な紙の扱い方が作者の制作意図とともに紹介されました。

2014年12月 屏東 Pingtung



国際社会に対応した能力 Human capacity adapted to the global society

積極的なコミュニケーション
active communication

多様性を認める柔軟性
flexibility to recognize the diversity

世界の人々との協働能力
collaboration with people around the world

自国の歴史、伝統、文化理解
better understanding of Japanese history, traditions and culture

芸術を通してできることは? What can we do through art?

言葉の通じない状況では絵や画像等を用いることで積極的なコミュニケーションが期待できる
We can communicate actively by using pictures and illustrations under the situation in different language.

誰もがその場で一緒にできる芸術活動を通して、人と協働できる
We can collaborate with people in an art activity that anyone can do together.

作品を見て自由に感じたことや考えを語る鑑賞活動において自分と異なる見方感じ方を発見することにより、多様性の理解につながる
We can recognize the diversity by talking together based on a free appreciation of art works and finding out different feeling and view.

自己紹介スライドショー Self-introduction slide show



画像や絵は、言語の通じない環境下ではコミュニケーションに有効である
Pictures and illustrations are useful under the situation using different language.

Based on an opinion, as a way of visual communication,
・ making a slide show with 10 slides per person.
・ devising a scenario to convey own interest and campus life

Student's thinking of making

自分の興味関心を整理した
Selecting carefully own interest and favorite thing.

覚えてもらえるよう顔や全身、作品を採り入れた
Adopting own face, body and art works which give people impact and memories.

共通文化である漢字や英語を使った
Using Chinese character as a common cultural thing. Using English as a global language.

内容が伝わりやすくなるようシンプルにした
Simplifying the slide images in order to convey own interest more clearly.



また、同時期に屏東大学教員学生による小作品展「台湾の美術」と美術教育講座による 3 年間の交流ポスター展を本学の図書館下の「たまごギャラリー」で開催しました。この展示では、屏東大学の学生が普段見ている風景や生活を改めて形にする機会として、台湾の自然や日常風景を題材としたもの、中国の詩をテーマとしたもの、表現方法への考え方、現代社会へのメッセージなどが語られました。

お互いの作品展を鑑賞するだけにとどまらず、屏東では、少数民族美術館台湾排灣族彫刻館での作品や台湾の現代美術、建築や寺院装飾の鑑賞、日本では書道専攻学生による書道パフォーマンスの鑑賞などを行いました。鑑賞対象は学生の作品、教員の作品、美術館企画展、パブリックアート、パフォーマンス様々です。芸術鑑賞に関する学生の感想には、作品のメッセージを読み取ろうとする能力の向上、言語能力を高めたいという意識の向上、背景にある異なる文化への関心の高まり、自国の文化への再認識が見られました。

最後に、ワークショップの取り組みを見ていきます。2014 年から学生企画によるワークショップを行いました。

一緒に活動し経験を共有する中で、お互いを発見しようというコンセプトのもと、2014 年には「漢字ボール」というワークショップを考案し、実践しました。漢字ボールワークショップの流れは次の通りです。「日本人学生と台湾の学生混合での班作り」→「各班に大きなビーチボールを準備」→「新聞紙でビーチボール全体を包み、マスキングテープで接着する」→「出来たボールを軽く投げ、新聞紙がしっかり固定されていることを確かめる」→「新聞紙の上から、球全体を皺をつけた書道用紙で覆い、マスキングテープで接着する」→「書道用紙の上に墨と筆で好きな漢字を一字一筆で書き、文字を書いた後、書いた人にその理由を聞く」→「班員全員が一人一人順番に書き、ボール全体を文字で埋める」→「班毎に完成した漢字ボールと活動への感想を発表、他の班と交流する」。学生たちは、これらの活動の中で交流を深める仕掛けを導入しました。例えば、台湾と日本の新聞紙を準備することで、会話を生むきっかけを作る、ビーチボールなどの球状のものを用いることで、新聞紙で包む際、書道用紙で覆う際、文字を書く際、球が動かないよう支えるなど、互いに協力し合うきっかけを作る、互いに手が触れ合えるような大きさにするなどがありました。漢字ボールを完成させる頃には、学生同士仲良くなり、漢字ボールの出来映えを鑑賞し、写真を撮り合う様子も見られました。学生の感想には、「『漢字ボール』で盛り上がった。そのあとは同じグループの学生同士で一緒に行動することが多くなった。」「漢字を使うことやものづくりを楽しむ心は同じだということを実感した。」「お互い書いた文字にすぐさま反応して、思い付いた字(漢字だけにとどまらず、英語や簡単なイラスト絵を描く学生も見られた)を書いていた。」「単なる自己紹介以上にお互いを知ることができた。」などの声がありました。

この「漢字ボール」は、10 月に中国の天津大学でも行いましたが、中国でも学生同士が和気あいあいと活動をしていましたので、漢字圏での交流にはおすすめの企画です。

2015 年には、「遊ぶことでコミュニケーションを図っていた子ども時代を思い出す」「誰もができる芸術活動」というコンセプトから、「Play for ...」というワークショップを学生が企画しました。これは、音楽の学生が本講義を受講したという経緯もあり、音楽と美術の活動からなりま

展覧会等での藝術鑑賞 Art appreciation in the exhibition



「台湾の美術」展見学・意見交流の様子 2016 大阪教育大学
Looking at the professor's and students' art works in "the Art of Taiwan"

workshop

2014



一緒に活動し経験を共有する中で
お互いを発見しよう

Working together, sharing these
experience, knowing each other



漢字ボールワークショップ
Making the "kanji" ball workshop



This group has imagined a Dragon Ball. この班は「ドラゴンボール」を想像した



2016/10/20

す。まず、ミニコンサートとして、音楽の学生が日本の文化を伝える意図で、日本の現代作曲家の 5 曲のピアノ演奏をしました。その後「散策&即興演奏」ということで、「楽器を持てば誰でも演奏家になれる」というコンセプトのもと、参加者が楽器を持ち、ファシリテータとなる学生の指揮に合わせて、屏東大学キャンパス内を大小、さまざまな音を出しながら歩くという活動を行いました。参加者が面白いと思う音を取り入れ、互いにコミュニケーションを取り合う姿も見られました。「演奏を通して、共感(呼吸を揃える)を持った」という感想がありました。次の日に美術の活動として「あそぶ、からだ、うごくー遊・体・動ー」を1時間実施しました。このワークショップの流れは次の通りです。「スズランテープを毛糸玉状にしたものを約 70 個床に転がしておく」→「スズランテープの玉を手に取り、事前に教室に張られた軸となるテープ数本に、引っ掛けたり、結び付けたり、絡ませたり、机などに通したりしながら空間全体を埋める」→「埋まったところでゆっくり外に出て、全体を確認し、場所や視点を変え作品を鑑賞する(5分)」→「全員が部屋から出て一列に並び、前の人の動きをまねながら作品の中を進む」→「最後に作品の下に仰向けに寝転び、テープをカットする」。スズランテープで空間が埋まり身動きが取れなくなると、テープ玉を投げ遠方の人に渡す行為が生じ、玉が飛び交うことで、参加者の動きも活発になっていきました。20 分で大きなtentのような迫力ある作品ができ、その後の作り上げたテープの造形物の中をぐぐって遊ぶという活動では、テープに引っかからないように片足ずつ高く挙げたり、四つん這いになったり、全身を使って動く様子が見られました。最後にゆっくりとすべてのテープが落ち体に覆い被さると「ワー」という歓声と拍手が自然と生まれ、学生たちは穏やかな表情になっていました。

2016 年に屏東大学学生来阪の際、「紙」をテーマとした学術交流として企画していただいたワークショップ「灯籠づくり」では、皆楽しい時間を過ごすことができました。一人 5 枚の赤い紙と紐飾りが手渡され、各机に準備された墨と金泥、筆で赤い紙に絵を描き、それらの紙をステープラーでつなぎ合わせるというものでした。おめでたい雰囲気になり、それぞれの国の生活の中にある伝統や文化に関わるものを紹介する企画も面白いものだと実感しました。

これらのワークショップに関する学生の感想には、「数人で一緒に活動することで、気持ちの『つながり』ができることを知った」、「作品の完成や出来映えの善し悪しを目指すのではなく、一つ一つの工程を重視し吟味する事が大事」、「想像以上、予想外のことに積極的なイメージを持った」というものがありました。

3. 成果と課題

このように、これまでの芸術を通した学術交流では、「言葉の通じない状況では絵や画像等を用いることで積極的なコミュニケーションが期待できる」「誰もがその場で一緒にできる芸術活動を通して、人と協働できる」「作品を見て自由に感じたことや考えを語る鑑賞活動において自分と異なる見方感じ方を発見することにより、多様性の理解につながる」といった成果が見られました。今後の課題としては、継続して芸術による国際交流の可能性を探っていききたいということと、他教科との連携による国際交流の可能性も探りたいということが挙げられます。以上が、国際学会での発表内容です。



成果と課題 outcome and challenging

言葉の通じない状況では絵や画像等を用いることで積極的なコミュニケーションが期待できる

We can communicate actively by using pictures and illustrations under the situation in different language.

誰もがその場で一緒にできる芸術活動を通して、人と協働できる

We can collaborate with people in an art activity that anyone can do together.

作品を見て自由に感じたことや考えを語る鑑賞活動において自分と異なる見方感じ方を発見することにより、多様性の理解につながる

We can recognize the diversity by talking together based on a free appreciation of art works and finding out different feeling and view.

継続して芸術による国際交流の可能性を探っていききたい。また、他教科との連携による国際交流の可能性も探りたい

To continue exploring the possibility of the international exchange through art and also the possibility to cooperate with other subjects.

質疑応答

福光:それでは渡邊先生のご発表についての質疑応答にはいりたいと思います。どなたかご質問のある方はおられますか。

D:授業のなかにこのような交流を盛り込むことは、先生にとってはとても大変なことだと思うのですが。

渡邊:たしかに大変ではあるのですが、「交流」を授業のなかにいれることによって学生のモチベーションも大変あがります。「交流する」とうことはあらかじめ分かっているので、学生は「何とかしなければ」という意識をもってくれるからだと思います。

D:なるほど、これは最初から「交流」をふくんだ授業なのですね。

渡邊:そうです。これは大学院1回生の『現代的教育課題とアート』という授業の一部なのです。このように「交流」を授業の一部に組み入れることは、受け入れ先や費用の問題はありますが、それはやろうと思えばできることなので、今後も盛んになっていくと思います。

I:私の大学でも、私がオーストラリアに行ってオーストラリアの幼稚園と協定をむすび、学生の教育実習の交換をしたいと思っているのですが、学生同士の交換実習のあとでそれが単位として認められるという単位の互換制度はできているのでしょうか。

渡邊:私も将来は是非そうしたいと思っているのですが、現在のところはまだ単位の互換までは至っていません。ただ、この授業も教員免許にかかわっていますので、単位の互換についてはそれぞれの国の教員免許の制度のちがいという点で問題は残るかと思います。このような交流をするのは大学教員個人や美術学科単独では無理なので、まず大学同士が交流協定を結ぶことが必要になってくると思います。つまり、まず学長同士で緊密な関係を作ってもらえれば私たちはさまざまな面で活動しやすいということです。

I:交流のための交通費、宿泊費などの費用は学生負担なのですか。

渡邊:教員に対してはプロジェクト経費として大学から支給されますが、学生は個人負担です。

I:そうすると、学生にはかなりの負担になりますね。

渡邊:台湾で3泊4日するためにかかる費用は、交通費はピーチ航空を使えば往復 14,000 円ほどで、全体の負担額はすべてあわせて3-4万円ほどですので、国内のどこかに行くよりもむしろ安いほどです。また、交流先の台湾の屏東(へいとう)大学は台湾南部の田舎にありますので、ホテルは立派ではないのですが安く泊まります。また、空港から大学までのバスのチャーター費は訪問先の大学が互いにプロジェクト経費から出すというような細かな打ち合わせはあらかじめできていますので、今回も空港から屏東大学までのバス代は1日1台3万円程度でしたが屏東大学がだしてくれました。また、屏東大学の学生が日本にくるときには、交流のためだけに来るのではなく、ついでに観光もするというような計画で来たり、あるいは、日本の場合には食費はプロジェクト経費からおとせませんが、台湾ではおとせるというように互いの国の事情はさまざまですので、そのようななかでの交流です。

G:この交流の最初は、まず学長同士の話し合いがあって、学長の方から「どうですか」という話しがあったのですか。

渡邊:そうです。最初この話しを学長から聞いて私たちも驚いたのですが、学長からは「もう、交流協定を約束してしまったし」ということでした。この交流以外に、下から上に上げていった交流もあるのですが、その場合でも必ず学長を通しますし、学長が認めればそれは結局大学同士の交流ということになります。

H:交流の内容についての質問ですが、内容は先生の方であらかじめ枠組みをつくる部分と、学生が自分たちでつくる部分があると思うのですが、そのあたりのバランスはどのようになっていますか。

渡邊:最初は「まず、お互いに交流するだけで良いのではないか」ということで、「自己紹介をする」ということだけを先生の方から指定したのですが、最初に屏東大学に行きますと交流のための展示物が用意されていましたので、「自己紹介だけではだめだ」ということになり、次の年からワークショップが始まりました。そのことを、またつぎの学年に伝えますと「私たちもワークショップをしたい」ということになりましたが、「前の学年と同じことはできない」ということになりました。ワークショップの内容はこのように毎年の積み重ねにより年々変化・向上していています。

H:学生のそのような話し合いは最初から円滑に進んだのでしょうか、それとも問題が起こったのでしょうか。

渡邊:『現代的教育課題とアート』は後期に位置づけられた授業なのですが、前期には「附属学校に行ってワークショップをする」という別の授業を組んでいます。前期の話し合いでは「だれが指導するのか」「どのような内容にするのか」などとさんざん揉めるのですが、それを経験させておくと「国際交流」の打ち合わせもスムーズにおこなえるようになります。つまり、前期で国内バージョンのワークショップをさせておくと、後期の交流もうまくいくようです。

H:さきほど、この交流には音楽の学生も参加したというお話がありましたが『現代的教育課題とアート』は、美術以外に音楽の学生も受講していたのですか。

渡邊:本来はこの授業の受講生だけが「アートのワークショップ」をするということだったのですが、今回は教養学科の音楽の先生から参加したいという話しがありました。そのときは音楽の先生だけが視察に行かれるのかと思っていたのですが、この授業を受講していない学生も連れて行きたいということでしたので、結局、音楽では演奏会を準備し、美術ではワークショップ準備して屏東大学を訪問しました。そのことを屏東大学に伝えますと、むこうでも音楽科がありますので早速その準備をしてくださり、結局美術の交流より

も音楽の交流の方が華やかであったということもありました。台湾での旅行も、音楽では「台湾の少数民族の歌を聴く」という企画をたてたので、美術の学生もそれに参加したのですが、意外なことに美術の学生も「すばらしかった」と言っていましたし、また「音楽の学生が加わったこともおもしろかった」という感想を述べていました。

今後のことについてですが、『現代的教育課題とアート』は美術の学生には必須なのですが、他学科の学生がもしこの「国際交流」に参加したければこの授業を受講するという形で大学院の学生すべてを巻き込んでいくことも可能ではないかと考えられますし、また、学部学生のなかにもこの交流に参加したいという人がいますので、それらの学生も参加できるような形態についても現在検討中です。

福光: 渡邊先生、ありがとうございました。それでは時間がきましたので終わりにしたいと思います。

以上が、第13回アート知っとくミーティングの内容です。今回は、美術の方面からの発表が中心となりましたが、質疑応答では書道の方々からの貴重な意見も出されました。今後も引き続き、現場の先生が実践されている様々なことを今後も是非持ち寄ってご報告下さい。